算命学中庸

【初年】２回目

２回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖三つの礎〗その(1)十二支

✏ その(1)十二支

三つの礎（みっつのいしずえ） (1)十二支　(2)五行説　(3)陰陽論

(1) 十二支（じゅうにし）
(2) 五行説（ごぎょうせつ）
(3) 陰陽論（おんようろん）

これら３つの理（ことわり）は、
算命学すべての技法の土台に
なります。

これから先――実践的な占いの技法（ぎほう）が出てきますけど、どれほど高度な技法でも、これから説明する三つの理（ことわり）を基盤にして構築されています。

✏ **それでは〖三つの礎（いしずえ）〗の成り立ちをご説明します。**

(1) 十二支（じゅうにし）

十二支は、暦（こよみ）の成り立ちと関係しています。

〔たとえば〕子年（ねずみどし）生まれとか、丑年（うしどし）生まれだとか、寅年（とらどし）生まれとか、私たちはこのように十二支をつかっています。

十二支は中国で４千年ほど前に生まれたものだといわれています。

暦（こよみ）が最初からあったわけではありません。

およそ、四千年ほど前、古代中国の時代において、文明が発達して行く過程で、どうしても暦（こよみ）を作る必要性が出て来たわけです。

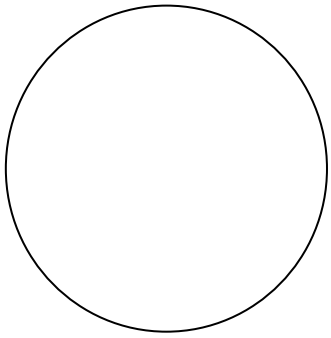
人間社会の文化レベルがあがってくれば、当然、どの国でも暦（こよみ）が必要になります。

古代中国でもおなじでした。

当時の中国人が、暦を作ろうと考えたときに、まず始めに問題になったのは、**１年を何ヶ月にしたらよいのか……**ということだったそうです。

宿命（１）円盤

この円を一周すると一年だと思ってください。



まだ暦がない中国の人間社会は、
一年が 12 ヶ月と決まっていない
時代でした。

１年は 12 ヶ月というのは、私たちが生まれたときからそのように決まっていますので、ごく自然につかっています。
その決まりすら、無い時代がありました。

元々（もともと）１年は１２ヶ月と決まっていたわけではありません。
それで暦（こよみ）を作成するときに、一番頭を悩ましたのが、１年をいったい何ヶ月にすればよいのか……ということだったそうです。

当時において、１年が 12 ヶ月という決まりは無かったので、１年を 10 個に分けて、１年を 10 ヶ月としても、かまわなかったのです。１年を５ヶ月というふうに決めて、１年を５つに分けてもよかったかも知れません。

それでは１年を何ヶ月にしたらよいのだろうか……ということを考えましたとき、当時の中国に自然思想という考え方がありました。

そこで賢人たちが考えたのは、**「自然の法則に沿って１年を分けるべきである」**ということだったそうです。

１年を 10 ヶ月と分けたほうが、もしかすると判りやすかったかも知れません。

人間が勝手に１年を 10 ヶ月とか、１年を 20 ヶ月にしたとしても、それが自然の法則に即(そく)したものでなければ、暦(こよみ)としての意味がないと考えたわけです。

そこで……人間も自然の産物のひとつなのだからという自然思想の考え方をもとにして**『人間がつかう暦は、自然の法則に沿って、１年を分けるべきである』**このような考えに至ったわけです。

１年を何ヶ月にしたらよいのか……？

このことは、昔の人にとってきわめて困難な作業だったと思えますが、自然の法則に沿って１年を分けてみようということになり、自然の法則をいろいろ調べました。

☞ 自然の法則に即してといっても、幾多の趣（おもむき）と営（いとな）みが自然のなかにあります。

なんとも不可思議な自然現象を観察するなかで、まずは夜空の星の動きに注目したのです。

夜空に輝く星々も、自然界の一員です。

↓

まず星の観測をしました

星を観測しましたところ、木星という星を発見しました。

↓

木星を発見したら、それが約１２年周期で運動している

ということが判明したわけです。

木星はとても明るい恒星（こうせい）で、夜になるとはっきり見えます。（東京ではどうかわかりません）

夜空に輝いている星のなかで、一番明るい星を見つけたら木星だと思ってもよい。といわれるくらいです。
ほかのどの恒星(こうせい)よりも明るいのが木星です。
木星より明るいのは、金星くらいだそうですが、金星はたまにしか観えないとのことです。

恒星（天球上で相互の位置をほとんど変えず、太陽と同じく自ら発光する天体）

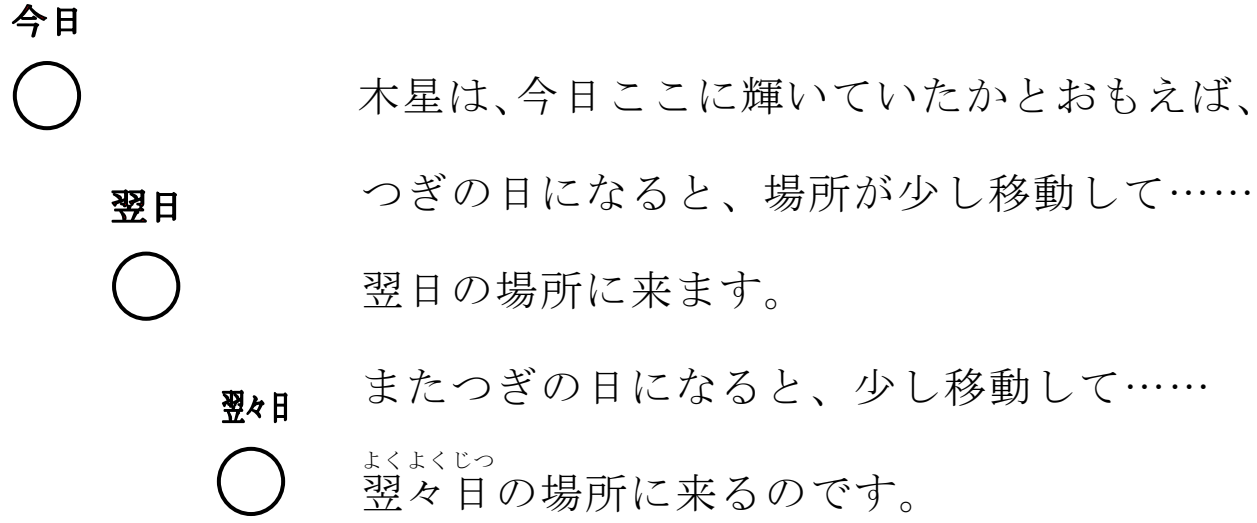
木星を観察しましたところ、大体 12 年毎(ごと)に、おなじ場所に戻ってくることがわかりました。

現代(いま)は、木星はほぼ 12 年で太陽の周りを一周している。ということは解明されていますが、当時の人たちはわからなかったでしょう。

……ほかの星はそういう動きをしないのに、木星だけがほかの惑星とは違う方向に移動して行って、１２年経つと、またおなじ場所に戻ってくる。ということがわかりました。

〔たとえば〕北斗七星（ほくとしちせい）という星は柄杓型（ひしゃくがた）に七つ並んでいます。この七つの星は何年経（た）っても、何十年経過（けいか）しても、形状は変わらないし、その場所も変わらないそうです。

ところが木性はどうでしょう…… **宿命（２）木星のうごき**



木星は、今日ここに輝いていたかとおもえば、つぎの日になると、場所が少し移動して……翌日の場所に来ます。

またつぎの日になると、少し移動して……翌々日（よくよくじつ）の場所に来るのです。

木星は、一日、一日ごとに場所が移動しまして、これが１２年経ちますと、天空を一周して、またおなじ場所に戻ってくるわけです。

そして、また１２年経つと、おなじ場所で光り輝きます。

このような木星の動きを観察して、とても不思議に感じたことでしょう。

ほかの何千・何万という星の位置は変わらないのに――なぜか、ひときわ明るい木星だけが、ほかの無数の星と

は違う方向へ移動して行き、１２年経つとおなじ場所に戻ってくるのはなぜなのか……？
古代の人の感覚では『天が人間になにかを教えてくれているかの如(ごと)く』とても神秘的に感じたことでしょう。

この木星の動き、12 年周期がきっかけになって〔１２〕という数字には、なにか重大な意味があるのでは……と考えるようになったのです。

☞ ここで間違った解釈をしてはいけないのは――。
木星が１２年周期だったから、十二支になったわけではありません。木性の 12 周期の〔１２〕という数字に注目するきっかけになったということです。
〔１２〕という数字が、自然の法則をあらわすうえで、なにか大切な意味があるのではないだろうか――？ と注目するきっかけに過ぎません。

☞ さきほどの **宿命（１）円盤** では、
「この円を一周すると一年だとおもってください」といいましたが、古代中国の賢人(けんじん)たちが想(おも)いついたことは、

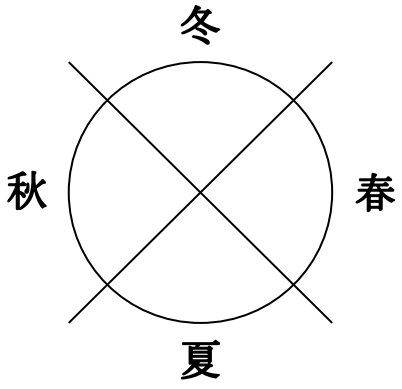
１年という周期のなかには、春夏秋冬という季節があるではないか、ということです。

大自然には四つの季節があります。

まずは、１年を春夏秋冬の四つの季節に分割するのが、もっとも自然の法則に沿(そ)っているのではなかろうか、と考えたのです。

✏ そこで、１年を春夏秋冬の四つに分けてみたのです。

宿命（３）春夏秋冬



春夏秋冬の四つに分割した。

大自然には春夏秋冬という四季がある。

それが大自然の流れで、大自然の法則に適(かな)った分け方ではないか、と考えて、

まずは１年を４つに分けたのです。

つぎに、当時の中国には「物事を『天(てん) 地(ち) 人(じん)』の三つに分けることが出来る」という考え方がありました。

「天 地 人」は、ものごとを三つに分けることができる。という考え方です。

このことについて、もう少し詳しく申しあげますと……
どのような事象にも**『始まり・中心・終り』**があるという意味になります。
どんな物事も、始めと、中心と、終り、から成り立ち、それらは全て「天(てん) 地(ち) 人(じん)」の三つに分けることができるという考え方です。
それに「天地人」という表現をもちいました。

〔たとえば〕太陽のうごきを考えますと……。
朝は東から昇ってきたら、お昼になれば天高く中心に来ます。そして、必ず、夜になると西に沈んで行きます。
始まりはあるけれど、終りがないとか、中心はなかったとか、そのようなことはあり得ないはずです。

〔たとえば〕人間の一生もそうです。
子供時代の初年期があって、大人になれば中年期があり、年齢を経(へ)れば晩年期がやってきます。
人生も、初年期・中年期・晩年期という、三つの時代で成立ちます。
〔人体図を三つの時代に分けます。人体図三分法で学びます〕

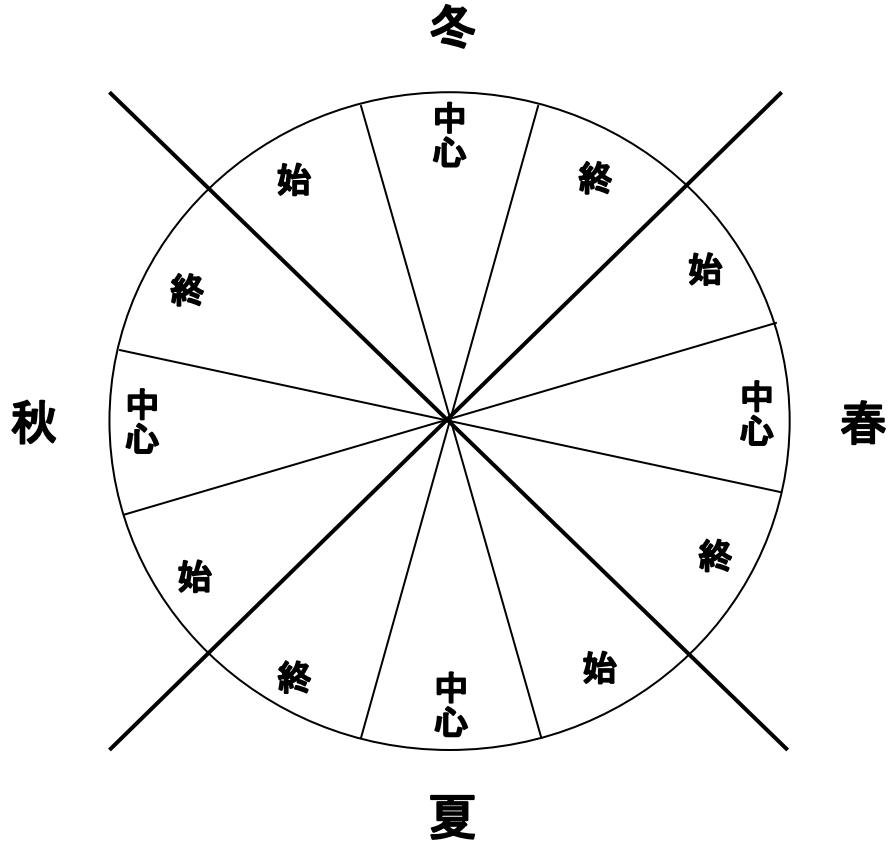
このように、全ての事象には、始めと、中心と、終わりが存在する。この考え方が当時の中国にありました。
なにかが始まると、だんだん強くなって、勢いが中心にきて、だんだん弱くなって、終焉(しゅうえん)を迎えます。

➪ 人間も赤ん坊として生まれます。
幼年期という人生が始まって、だんだんと成長していく過程で、肉体も精神も強く逞(たくま)しくなって、人生の中心を迎えます。
その中心を過ぎると、チカラが衰える時代がやってきて、最後には弱くなって終わります。

ものごとの事象は、全てそのような推移(すいい)をたどるのではないか、という考え方を季節に当てはめてみたのです。

天地人（てんちじん）

宿命（４）天地人



この十二支盤の姿は、春・夏・秋・冬の各季節にも……「始まりがあり」「中心があり」「終わりがある」という意味を示した図です。

天地人の考え方を季節に当（あ）てはめました。

宿命（４）天地人 を小さくしたのが 宿命（５）十二支盤 です。

〔たとえば〕宿命（５）十二支盤 のように

冬という季節を三つに分割して、

「冬の始め・冬の中心・冬の終わり」というふうに分けることができるのではないだろうか、と考えたわけです。

そして、1 年を 12 ヶ月に分けたのです。

☞ 冬も始まったばかりの時期には、寒さが本番に達する前の季節があります。

冬も中心に来ると、最も冬らしい寒さの厳(きび)しい冬の中心という時期があります。

冬も終わりのほうになれば、今度は、春が近づいてきますから、寒さが幾分ゆるんでくるという、三つの時期に分割することができるはずだと考えたわけです。

☞ 春もおなじように三つに分けます。

春も始まったばかりのころは、まだまだ冬の寒さがかなり残っています。

春が中心にくると、最も春らしいぽかぽかとぬくもりのある季節感がめぐって来ます。
春も終わりのほうになると、今度は夏が近づいてくるので、かなり暑くなって来る時季(じき)がまわって来ます。
春にも「春の始め・中心・終り」があると考えたのです。
夏もおなじように「始め・中心・終り」と分けました。
秋もおなじように「始め・中心・終り」と分けました。

このようにして、全ての季節を「始めと、中心と 終りに」分割したのです。

「１年が 12 ヶ月に分けられた」

たまたま、これが木星の 12 年周期とおなじ、〔１２〕という数字であったわけです。
この方法で１年を１２ヶ月に分割すると、それらの一つ一つが１ヶ月になるわけです。
そこで、１ヶ月の長さを測って見たところ、約３０日になっていたので、１ヶ月を３０日というふうに決めたところ、これが月の周期とほぼ一致していました。

１ヶ月（３０日）⇒ 月の周期に一致した

これらのことは、「天 地 人」の考え方に沿って、季節を１２分割したのが始まりです。
そして、１年を１２ヶ月に分けて見ると、１ヶ月の長さは、約３０日だったのです。
この姿は、月の周期とほぼ一致していたわけです。

➾ 月は、29．５日……くらいで、地球の周りを１周しているそうですが、当時の人達の感覚でいえば、月が新月で出てきて、だんだんと膨(ふく)らんできて、満月になって、また欠けて行き、三日月になって消えていく……！
それまでが、約３０日かかっていたわけです。
月は１年に約 12 回、３年に１回位は、13 回の満ち欠けを繰り返すそうです。

季節を春夏秋冬に分けて、それぞれの季節に「天地人」の考え方を当てはめて、１年を 12 ヶ月に分けてみると、最初に見つけた木星の周期とも一致していました。

・木星の周期とも一致

木星は１２年で天空を１周します。１年経つと……このくらい移動して、また１年経つとこのくらい移動してと

いうふうに、１２年経つとまた元の場所に戻って来ます。
その周期を鑑(かんが)みますと、木星の１２年周期とも一致して、月の周期とも一致しました。
このような経緯(けいい)があって、１年は１２ヶ月に決まったのです。

☞ 私たちが暦(こよみ)の 12 ヶ月を呼称するには、１月(いちがつ)とか……２月(にがつ)とか、３月(さんがつ)とか、いいあらわします。

ところが、昔の中国では、12 ヶ月の区分をいいあらわすときに、とても難解な名称が、それぞれの月(つき)に付けられていたのです。

当時は、文字認識などの教育が行き届いていません。
文字の読み書きをできない人たちが存在した時代がありました。
そうしますと、暦(こよみ)として民衆がつかうためには、ごくごく身近な動物の名前を用いるほうが解(わか)りやすいです。
そのほうが、暦(こよみ)としてつかいやすいということで……
十二支が生まれたのです。

☞ 宿命（６）十二支盤 を見ると、おわかりになりますように、十二支と季節が配置されています。

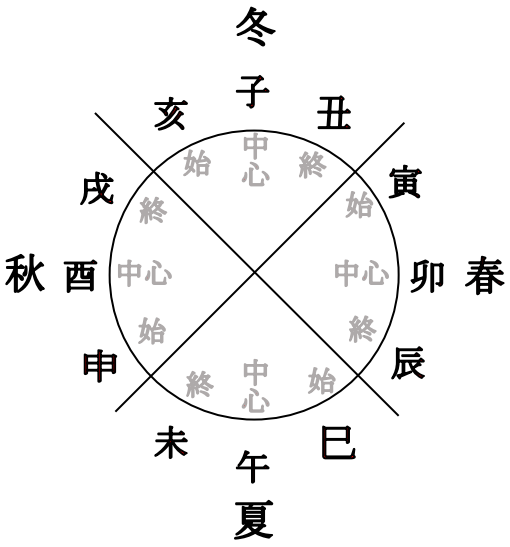
十二支はご存知のように（**子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥**）というように、12 個の（支）があります。

春の十二支は（寅卯辰）の 3 つです。

夏の十二支は（巳午未）の 3 つです。

秋の十二支は（申酉戌）の 3 つです。

冬の十二支は（亥子丑）の 3 つです。



宿命（６）十二支盤

実は、十二支は先ほどいいましたが、つかいやすく、おぼえやすいということから動物の名前を用いただけです。十二支の動物の名前は、単なる記号にすぎないのです。

当時の民衆がおぼえやすければ、花の名前でも、あるいは、虫の名前でも構わなかったわけです。

花であれば、ここは〔桜の月〕、ここは〔菊の月〕、ここは〔薔薇（ばら）の月〕というのでも、構わなかったわけです。（ネズミ）といえば誰でも知っています。

（ウシ）といえば誰でも知っていますので、身近な動物がいいだろう。ということで、動物の名前がつかわれただけなのです。

十二支自体は、単なる記号にすぎません。

十二支の性質と動物の名前とは、まったく無関係です。

十二支はその動物の性質とは、まったく関係ないのです。

☞ 民衆が覚えやすければ……仮に A.B.C.D でも構わなかったのです。

しかし、A.B.C.D という文字は中国にありません。

そこで、身近な動物の名前をつかったほうがよいということで、私たちが表現している十二支の名前になっただけです。

今でも、動物を元にして占うという、占いが存在していますけど、あれは全くの迷信です。

〔たとえば〕「あなたはネズミ年(どし)だから、チョロチョロしている」とか、「ウシ年だからのろいのよ」とか、「トラだから強いね」と、いうようですが、まったくの迷信です。トラだから強いわけではないのです。

もしトラ（寅年）が強いのであれば、ウサギ年（卯年）は弱い人になってしまいます。

その根拠は……インドにも十二支が生まれたのですけど、インドの十二支には〔象〕が入っています。
亥（いのしし）の代わりに、亥の場所に象が入っています。
インドの国に猪（十二支の亥）という動物はいません。
象はとても身近な動物ですから、十二支のなかに入っています。つまり、猪でも、象でも構わないのです。

あるいは、十二支に猫がいないのは「どうして……」という人もいます。
それは、当時の中国に、猫がいなかったのです。
今から四千年前のエジプトには猫がいました。
猫はエジプトが原産だそうです。当時、猫という動物はエジプトにしか生息していなかったそうです。
古代中国というのは、東洋に猫が伝わって来る前の時代のことです。（日本もおなじです）
中国に猫がいなかったので、十二支のなかには入っていないだけです。

中国で猫が身近な動物として飼われていれば、12ヶ月のどこかの月に、猫が十二支の１つとして入っていたかも知れませんね。

現在(いま)でこそ、パンダは人気ものですが、古代中国の時代にパンダが有名な動物であれば、パンダも十二支の一員として、入ったかも知れません。
パンダが生息していた地域の人たちは、パンダの存在を知っていたのでしょうけど、一般的に身近な動物ではないので、十二支のなかに入っていないのです。

……話しがわき道にそれました。元へもどります。

✏ 自然界を観察することで、１年が12ヶ月と決まりまいた。
つぎの問題として、１年はいつから始まるのか……それを決めないことには、暦(こよみ)とはいえません。
それは「１年はいつから始まるのか……」ということになります。
１年の始まりを決めるのは『春夏秋冬の移り変わりを調べていけば、わかるのではないか……？』という考えに

至ったのです。
この分け方は、春夏秋冬を四つに分割したことが、元になっています。

そうしますと、
『春』の自然界は、どういう現象が起こるのか？
『夏』になると、自然界はどのように変わるのか？
『秋』になって、葉の色に変化があらわれると、自然の姿はどのように転ずるのか……という季節の移り変わりを観察したのです。

……春の到来で、植物は芽吹いて、嫩芽（どんが）は成長を始めます。土のなかでも蠢（うごめ）きはじめます。
動物も冬眠から目覚めて活動をはじめます。
まるで、春の訪れと同時に、自然界の万物がいっせいに動きはじめて、躍動（やくどう）するように見えたわけです。
現在でも、もちろん、そう見えるとおもいます。

自然が活発に動きはじめる時期、それが１年の始まりではないだろうか、と考えたわけです。

１年の始まりは、自然界が活動をはじめる時期である。
それは春であり、春こそが１年の初めの季節である。
春が１年の始まりという結論に漕ぎ着けたのです。

私たちが季節の四季を言葉にするとき、「春夏秋冬」といいいます。
「夏秋冬春」とか「夏秋冬春」とかの順番ではいいません。
必ず……春 夏 秋 冬の順番でいうはずです。

このように、『春』から季節の名称を呼びはじめるというのは、もともと、春が１年のはじまりだということが、暦のうえで考えられていたからです。

この暦は日本にも古くから伝わって来ています。
日本においても『春 夏 秋 冬』という言い方をしているのは、『春から１年が始まる』という考え方に基づいているからです。

✏『春は１年の始まり』です。といいました。
つぎの問題は「その春はいつから始まるのか」ということです。
春はいつから始まるのか……？
春というのは、正確に「何月何日から始まるのか」ということがわからなければ、正しい暦とはいえません。

もうすでに……春は始まっているのか？
春は始まっていないのか？
今週なのか？
はて、来週なのか？
このような不明確なことでは、暦になりません。
“春はいつから始まるのか”決めなければなりません。

当時の人たちが、それをどのようにして決めたのかといえば、「太陽の動きによって、決まるのではないか……」と考えたのです。

春夏秋冬の季節が生まれるのは「太陽の動きによって、生まれるのではないか」と推測（すいそく）したのです。

太陽の勢いが強くなると、陽射しが強くなってきます。
日照時間も長くなり、暑くなって夏が来ます。
太陽のチカラが弱くなり、日照時間も短くなって来ると
涼しい風が流れ漂(ただよ)い、秋の季節にはいります。
もっと太陽が弱くなれば、冬になります。

このような太陽の強弱の変化と､季節の関わりにおいて、
太陽の光が強くなりはじめると、春がくるという結論に
いたりました。

それが正しければ、数年間、太陽の推移を観測すれば、
『春』のはじまりがいつなのか判明するのではないかと
考えて、太陽の観測をしたわけです。

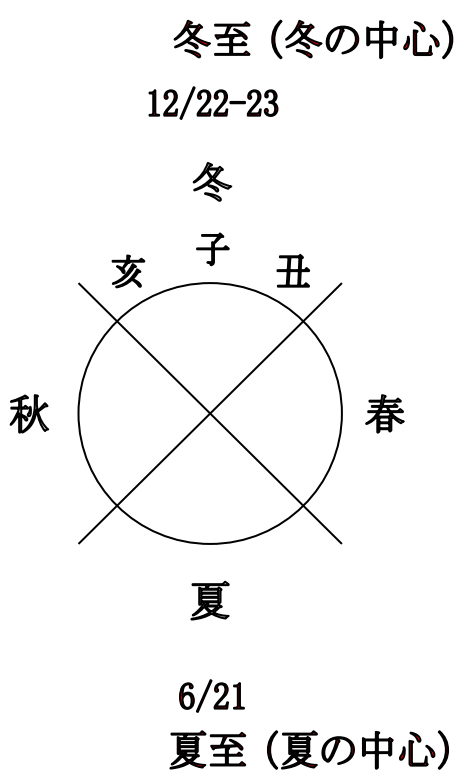
太陽の観測をした

↓

冬至・夏至・春分・秋分を発見した

そうしましたところ……まず冬至が発見されました。

宿命（７）冬至・夏至



つまり、１年中で昼が一番短い日が発見されました。

これが 12 月 22～23 日位です。

観察を続けて……毎年 12 月 22 日になると、太陽の力が最も弱くなるということが判ったのです。

冬至（とうじ）は日照時間も一番短く、太陽の日差しが最（もっと）も弱い日です。

太陽が弱くなると、寒くなって冬が来ます。

それなら、太陽が最も弱い冬至（とうじ）のところは（冬の中心）になると決めたわけです。

冬至（とうじ）は冬の頂点に達する日という意味で、冬至と名づけられたわけです。

「冬至は冬が中心に至る」

冬の十二支は（亥 子 丑）です。

中心

冬の十二支は（亥月） 子月 （丑月）と３ヶ月間続きます。

冬至

その中心のところ（子月）に〔冬至〕が来るように暦は設定されています。

冬至から、ちょうど半年を経過した反対側……夏の中心のところで、昼の一番長い日が発見されました。

この日は夏至になるわけです。

大体 6 月 21 日頃です。

夏至の日は、日照時間が一番長くて、日差しが最も強い１日です。

太陽が最強となる日です。

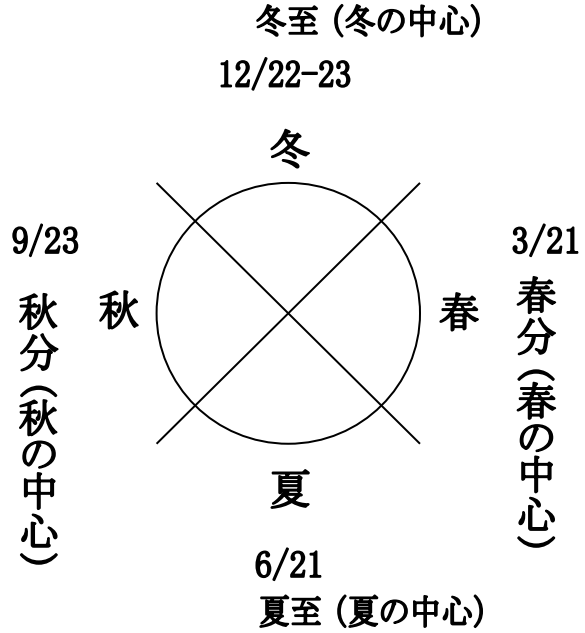
太陽が強くなり、暑くなって夏になります。

太陽が最も強くなる１日〔夏至〕のところは（夏の中心）の１日になると決めたのです。

夏至という言葉は「夏が至(いた)る」と書きます。
つまり、夏の頂点に至った（到達した）という意味で……
夏至と名づけられたわけです。

✏ 春分(しゅんぶん)と秋分(しゅうぶん)

つぎに、冬至から夏至までは半年ありますけど、冬至から夏至に至るまでの丁度・中間のところ、ここで昼と夜の長さがおなじになるところが、発見されました。
これが春分(しゅんぶん)の日になるわけです。3 月 21 日頃です。



宿命（８）春分・秋分

春分(しゅんぶん)の日は昼の長さ、夜の長さがちょうどおなじです。

太陽が強くもないし、弱くもない、太陽のつよさが１年のなかで、もっとも平均している日だとして（春の中心）と定めたのです。

この反対側の秋分（しゅうぶん）の日も、ほぼ同時に発見されています。

秋分が（秋の中心）です。

秋分の日は９月 23 日位です。

太陽の観測をして、それぞれの季節の中心がわかった。

↓

冬至・夏至・春分・秋分を季節の中心と定めた。

参照 ⇒ 宿命（７）冬至・夏至　　宿命（８）春分・秋分

冬の中心は太陽が最も弱くなる冬至だとして、春の中心が春分の日だとしたら、冬の中心と春の中心から数えて、ちょうど真ん中にぶつかるところが、冬と春の境目だということになるはずです。

↓

冬至と春分の中間点は、冬と春の境目である

そこは参照 ⇒　宿命（９）節分

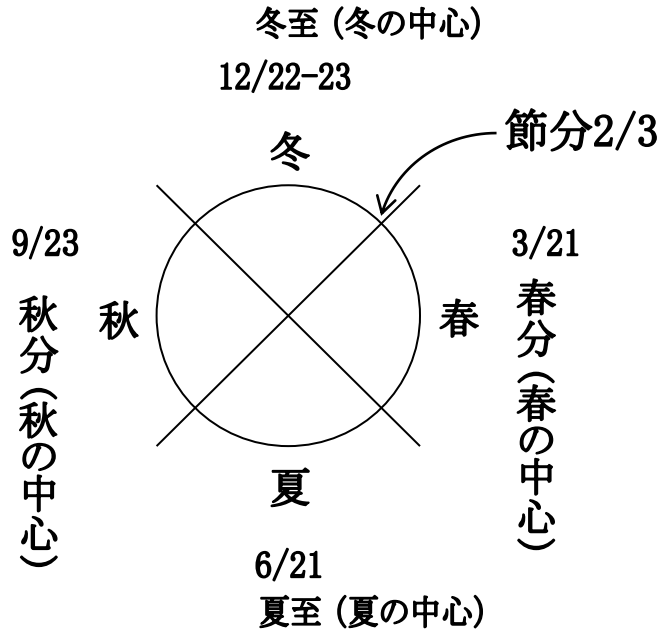
✏ 春の中心と、冬の中心がわかりました。

そうしますと、それぞれの春の中心と冬の中心から数えてゆきまして、真ん中でぶつかる箇所が、冬と春の境目だということになります。

これは、日(ひ)にちがわかっていますから、数えていけば出てきます。

数えてゆくと……だいたい２月３日になったわけです。

宿命（９）節分

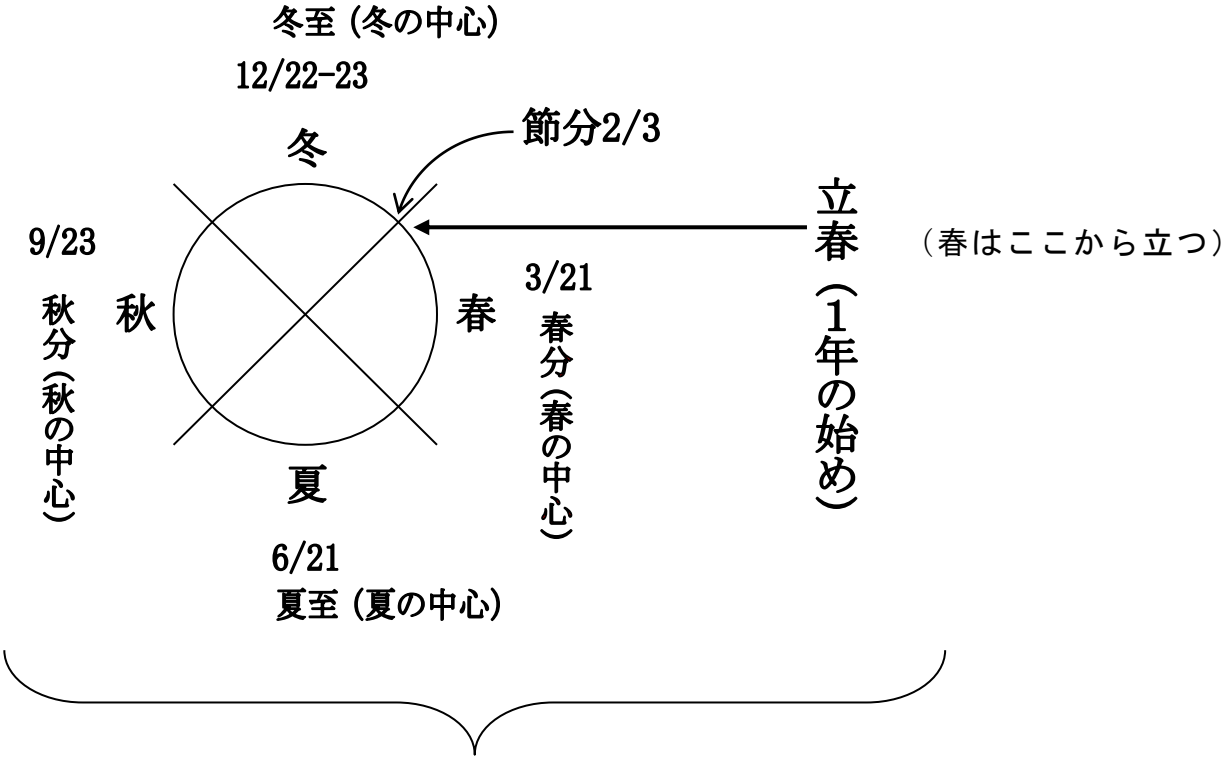


冬至と春分のちょうど中間点の 2月3日 というのは……季節を分ける日だとして『**節分**』と名付けました。

これが節分のはじまりです。

☞ 節分が季節の分れ目､冬と春の分かれ目だというのなら、つぎの日から春がはじまるとして、節分のつぎの日〔２月４日〕を**立春**（りっしゅん）と名付けたのです。

宿命（１０）立春



これをもとにして、節分と立春が決まった

春はここから立つ日だとして“**立春**”と名付けまして、ここを １年の始まる日 と決めたのです。

「立春は１年の始まる日です」このことは、ぜひとも覚えておいて頂きたいのです。

是非とも頭に入れておいてください。占いのうえでも必要です。

“**立春**”は、２月４日の場合がほとんどですけど、閏年(うるうどし)が来ると、２月５日になったりすることもあります。

それは毎年……冬至が何日なのか、夏至が何日なのか、その年によって違うからです。

地球は、まん丸い軌道を描いていません。楕円形の軌道で太陽の周囲をまわっています。

それゆえに、春分の日が 3 月 21 日になることもあれば、3 月 20 日になることもあるわけです。

それによって、立春も１日ずれることがあります。

１日ずれる……それは「毎年、毎年、太陽の観測をしていて」節分はいつなのか、立春はいつなのか、ということを測定して決めていますので替わります。

☞「今年の立春は 2 月 4 日なのに、来年は 2 月 5 日だなんておかしいわ、古い暦(こよみ)だからいい加減では……」と、そのように考える現代人もいるようですね。

私たちがつかっている現代のカレンダーは西洋暦(せいようれき)です。

西洋歴カレンダーに書かれている〔１月１日〕という日(ひ)、日本では元旦があります。

そこで西洋歴の成り立ちを参考までに申しあげます。

なぜ……西洋歴が１月１日から、１年が始まるのかといえば、それは中世のヨーロッパにおいて、ローマ法王が『12 月 25 日のクリスマスの１週間後がよいのではないのか』ということで、１月１日に決めたのだそうです。
12 月 25 日のちょうど１週間後は、１月１日です。
『クリスマスのお祝いをして、それからチョットゆるりと休んで、１週間位経(た)ったほうがいいだろう』ということで決まったそうです。
クリスマスが日曜日だと、１月１日も日曜日です。
クリスマスが土曜日だったら、１月１日も土曜日です。
このようにして、決めただけです。
そこには、1 年の始まりは、なぜ〔１月１日〕なのかという科学的な理由はないのです。

２月は、28 日間しかありません。
「大の月」と「小の月」と、交互(こうご)に来るということ自体、当時のローマ法王が勝手に決めただけのことです。
それは西洋の星占いで、２月はあまり良い月ではないので、チョット減らしてしまおう……ということで、減らしたのだそうです。

2月は28日間しかないということについての、科学的な理由はなく、自然の法則もありません。

３月は、３１日間迄あります。

私たちがつかっている西洋のカレンダーは、非科学的な暦（こよみ）ということになるのでしょうか？　いかがでしょう。

☞ 西洋暦のカレンダーよりも、古くからの中国の暦（こよみ）のほうが、はるかに科学的な暦といえます。

なぜ！　科学的といえるのでしょう……？

それは太陽の動きによって、１年の始まる日を割り出しているからです。自然の法則を取り入れた暦なのです。

〔たとえば〕節分というのは、昔の大晦日に当たります。

２月４日が昔のお正月ですから、新年が来るので、豆をまいて、お清めをしていたわけです。

２月４日が１年の始まりというのは、日本も江戸時代までは、立春の辺（あた）りを、お正月としていたのです。

天体の摂理（せつり）を観察してつくられた暦（こよみ）は、自然の法則自体を反映した科学的な暦といえるでしょう。

今でも香港や台湾では旧正月をやっていると思いますが、旧正月はこの立春をお正月とした。この暦（こよみ）のことです。

日本では、今でもお正月のことを「新春（しんしゅん）」とか「初春（はつはる）」とかいいます。

立春（りっしゅん）がお正月ですから「お正月になれば春」ということで、新春あるいは、初春という言い方をしたわけです。

今のカレンダーの１月１日は、まだ真冬ですから――新春とか、初春とかいうのはいかがなものでしょう。

呼び方だけを、名残（なごり）としてつかっているのです。

✏ ここまでの話しのなかでは……、

「１年を 12 ヶ月に分けた成り立ち」

「立春が１年のはじまり」

ということを、ご理解いただければよろしいのです。

【初年】２回目〖三つの礎〗その(1)十二支　終わります

つぎの授業 ⇒【初年】３回目〖三つの礎〗その(2)五行説（ごぎょうせつ）